

「日本語教育の参照枠」について

1. 取りまとめの背景

近年、世界中で国境を越えた人の移動が進み、複数の言語を使用し、複数の社会に生きる人々が増えてきました。また、国内外の日本語学習者も多様化し、複数の場所や教育機関の間を移動しながら日本語を学ぶことが増えてきました。国内に在留する外国人は289万人（令和2年末）で、うち172万人（令和2年10月）が就労者となり、過去最高を記録しました。また、海外における日本語学習者は約385万人（平成30年）となっています。

そこで、日本語学習者が学ぶ場所を移動しても継続的な学習が続けられ、自分の日本語能力を把握できるようにするための学習環境を整えることが必要になってきました。



「日本語教育の参照枠」は、このような状況のなか、国内外における日本語教育の質の向上を通して、多様な文化を尊重した活力のなる共生社会の実現に寄与することを目的として、取りまとめられました。

2. 「日本語教育の参照枠」とは？

「日本語教育の参照枠」は、言語・文化の相互理解・相互尊重を前提として、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages：CEFR）を参考に、学習段階に応じた教育内容などを示し、個々の日本語学習者に応じた日本語教育を継続的に受けられるようにするための、日本語教育に関わる全ての人々が参照できる、日本語学習、教授、評価のための枠組みです。

日本語教育に関わる全ての人とは、日本語教師、試験機関、行政担当者、企業の研修担当者、日本語学習者、その周囲の人々（家族、友人、職場の人、地域住民など）を含みます。日本語でコミュニケーションを行うすべての人が参照することができます。

3. 言語教育観の三つの柱

「日本語教育の参照枠」では、多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現を目指し、以下の三つを言語教育観の柱として示しています。

1 日本語学習者を社会的存在として捉える

学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。言語の習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である。

2 言語を使って「できること」に注目する

社会の中で日本語学習者が自身の言語能力をより生かしていくために、言語知識を持っていることよりも、その知識を使って何ができるかに注目する。

3 多様な日本語使用を尊重する

各人にとって必要な言語活動が何か、その活動をどの程度遂行できることが必要か等、目標設定を個別に行うことを重視する。母語話者が使用する日本語の在り方を必ずしも学ぶべき規範、最終的なゴールとはしない。

「日本語教育の参照枠」では、日本語学習者を社会の一員として日本語を使って様々な社会的な活動に参加していく存在と考え、多様な日本語使用を尊重し、社会と教室を隔てることなく、日本語を通じた学びの場を人と人が出会う社会そのものとすることによって、共生社会の実現を目指します。

4. 「日本語教育の参照枠の構成」

「日本語教育の参照枠」では、日本語教育に関する様々な指標を示しています。その中でも最も基本的なレベル尺度は、日本語能力を 6 レベルで示した「全体的な尺度」です。

A1、A2は「基礎段階の言語使用者」として、ごく基本的なコミュニケーションができるレベルです。

B1、B2は「自立した言語使用者」として、他者に頼ることなく社会生活を送ることができるレベルであり、ヨーロッパの多くの国々が、移民に対してB1レベルまでの学習機会を保障しています。日本においては、「日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針」(p.9)で「地域に在住する外国人が自立した言語使用者として生活していく上で必要となる日本語能力を身に付け、日本語で意思疎通を図り、生活できるよう支援する必要がある」と記されています。

Cレベルは「熟達した言語使用者」で、外国語教育としてではなく、大学等の教育機関で専門的な内容を学びながら身に付けていくレベルと言われています。

全体的な尺度（抜粋）

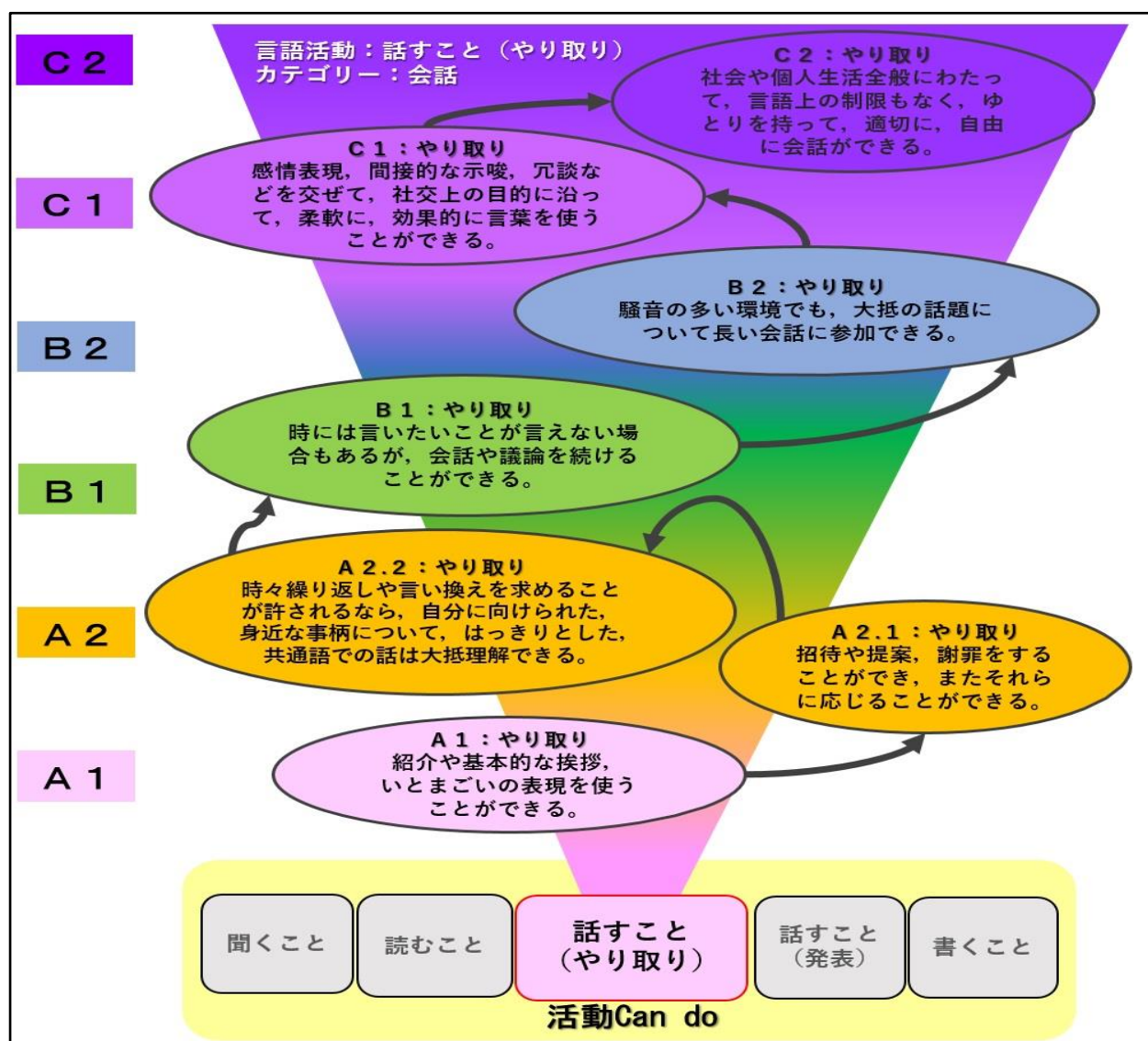
熟達した言語使用者	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。自然に、流ちょうかつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流ちょうに、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、具体的な話題でも抽象的な話題でも複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで熟達した日本語話者とやり取りができるくらい流ちょうかつ自然である。
	B1	仕事、学校、娯楽でふだん出合うような身近な話題について、共通語による話し方であれば、主要点を理解できる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結び付けられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

・各レベルについての説明は、CEFR 日本語版（追補版）の訳文を基にし、CEFR 補遺版を参考に一部修正を加えた。

5. 「日本語教育の参照枠」における日本語の熟達度

「日本語教育の参照枠」では、「聞く」、「読む」などの言語技能を、下の図の通り5つの言語活動に整理し、実生活において日本語を使ってどのようなことができるのかに注目します。具体的な言語活動は、「～できる」という形で示した文である Can do (Can do statements の略) で表します。「日本語教育の参照枠」では、約500項目の活動 Can do を示しています。日本語での「～できる」は、A2.2の Can do のように、日本語学習者の努力だけではなく、周りの人々の配慮や歩み寄りによって達成できることもあります。

「日本語教育の参照枠」における日本語の熟達度「話すこと（やり取り）」の場合



【関連情報】

「日本語教育の参照枠」（報告）令和3年10月12日

https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/93463101.html

「日本語教育の参照枠」活用の手引き <https://www.bunka.go.jp/>

日本語能力自己評価ツール「にほんご チェック！」 <https://www.bunka.go.jp/>

（文化庁国語課）